

## 文化振興拠点間における連携の事例

### < 事業連携について > （県立の各施設に対するアンケート調査の結果から）

アンケート調査の結果から、各拠点がそれぞれの強みを生かして連携することで、県民にとって、各拠点の収蔵資料等に多く接する機会ができた、豊かな文化に接する機会を増やせたり、また、生涯学習をより多面的で充実したものとするができる、さらに、交流を生み出すこともできる等、多くの成果があったことが考えられる。

一方、拠点の側にとっても、事業の活性化、収蔵資料公開機会の増加、生涯学習の機会の提供、一つの拠点ではできないような来館者の開拓や拡大、連携相手から学んだノウハウの活用、その他多くの成果をあげることができたことが分かる。

#### 1．動物の教科書（県立博物館展示企画を核とした夏休み子ども呼び込み事業）

連携：県立博物館、県立図書館、三重県総合文化センター、生涯学習センター

内容：動物骨格標本をはじめとする、生態系の分類・進化を学ぶ展示企画を実施した。また、期間中には県立図書館での書籍特集、生涯学習センターまなびい場での映像特集、子ども対象の学習講座を実施した。

成果：県立博物館にとって、収蔵資料のアウトリーチ展示として公開機会が増加した。

#### 2．古楽アンサンブル ラ・フォンテーヌ ミュージウムコンサート

（美術館企画展関連文化会館公演出前事業）

連携：県立美術館、三重県総合文化センター

内容：県立美術館企画展「ウィーン美術アカデミーの名品展」の開催期間中に、このシリーズでは初となるバロック音楽のミュージウム・コンサートを実施した。

成果：ミュージウムコンサートによって、美術の近接領域を紹介するとともに、美術館の新たな来館者を開拓した。

#### 3．斎宮歴史博物館・（財）三重県文化振興事業団連携事業（公立施設連携出前事業）

連携：斎宮歴史博物館、三重県総合文化センター

内容：文化会館事業「伝統芸能サミット」の能演目「絵馬」が、斎宮の故事にちなんだ演目である偶然性に着目し、双方の事業領域である、事業団の文化公演事業、生涯学習事業と斎宮歴史博物館の展示企画事業とを互いに連携（事業企画のテーマ連携、事業PRの連携、事業集客の連携、相互アウトリーチ事業の連携等）させることで、双方にとって単独でなし得ない事業効果、PR効果を創出する複合事業をトライアル実施した。

成果：「『能絵馬』と斎宮」展は18日間実施し、891名の見学者があった。またレクチャー講座は94名、散策ツアーは60名が参加した。

#### 4．三重県熊野古道センター開館記念特別企画展

連携：三重県熊野古道センター、三重県立博物館

内容：三重県立博物館の移動展示を熊野古道センター開館記念特別企画展と共催して、「絵図にみる巡礼道中の人々」を開催した。

成果：東紀州地域をはじめとして、県内外から多くの来場者（17,551人2月10日のオープンから3月31日まで）があり、熊野古道や西国巡礼などへの関心を深めることができた。また、県立博物館が持つノウハウがその後の熊野古道センターの企画展開催に役立った。

## 5．M祭！（広域小学生呼び込み事業）

連携：県立図書館、県立博物館、斎宮歴史博物館、みえこどもの城、津地域農業改良普及センター、三重県総合文化センター

内容：18年度は県立博物館の展示企画にちなんで、「楽しく学ぼう！なんでもアニマル」をサブタイトルに様々なイベントを実施し、県内の多くの地域から約3,000人の集客があった。また、18年度は新たに津地域農業改良普及センターがイベントに参画した。

## 6．ゾーンライトアップ事業（ゾーン全体PR・ゾーンへの県民呼び込み事業）

連携：県立博物館、三重県総合文化センター、三重フィルハーモニー交響楽団

内容：18年度のテーマはモーツァルト生誕250周年を記念し、音楽をモチーフに約10万球の光で演出。企画・制作には企画運営ボランティアに協力いただき、初日となる11月25日には三重フィルハーモニー交響楽団の金管演奏によりカウントダウン点灯式を開催した。

## <機能連携について>

県史編さん室が県民のレファレンスを受け、調査の結果、回答していったという事例をヒントに、そこから博物館と公文書館、図書館が、それぞれの機能を生かしながら連携していくことで、県民が、より大きな成果を得られると考えられること。

### 1．県史編さん室が受けたレファレンスの事例

少し前になるが、千葉県のAさんから「戦後まもなく、半年ほど四日市付近の繊維工場で働いていたことがある。年金の関係でその工場名を社会保険事務所に報告しなければならないが、自分自身に工場名の記憶がない。何か手掛かりはないか」という問い合わせがあった。特に資料の少ない時期の問い合わせで困ったが、『伊勢年鑑』の「工場一覧」によれば「東洋紡績富田工場」か「鐘化紡績四日市工場」ではないかと回答した。「富田工場」という響きから、若干記憶がよみがえったのか、「富田工場かもしれない。更に詳しく調べるにはどうすればよいか」との質問を受けたので、東洋紡の社史編さん室の存在を教えた。

### 2．博物館と公文書館・図書館のレファレンス機能について

博物館が中心になって行うレファレンスを、千葉県のAさんの問い合わせを例として想定してみると以下ようになり、図書館・公文書館等の施設もその一端を担う。

#### 博物館

- ・紡績機械や製品の実物
- ・当時の従業員作業着等
  - ・工場の建築図面（模型含む）
  - ・東洋紡富田工場や作業風景の写真
  - ・戦後まもなくの四日市周辺地図

#### 公文書館

- ・四日市市役所の住民関係綴等
- ・東洋紡「家庭時報（富田工場版）」（県史資料）
- ・『伊勢年鑑（工場一覧）』

#### 図書館

- ・『東洋紡社史』
- ・当時の地元新聞資料

- ・それぞれの施設によって、対象とする資料が異なるが、博物館が四日市周辺地図～地元新聞資料を所蔵していても不都合はない。しかし、公文書館や図書館が当時の紡績機械や製品、従業員作業服などを収蔵するのは難しいし、機能上、不適切である。
- ・こうしたことから、博物館が総合的に判断して収蔵対象資料を分担した上で、それぞれの施設でのレファレンス機能をも統括することが適切である。